

【2】高等部の生徒の発達的特徴と、からだづくりの目標

最近、障害児教育の実践において、「生活年齢」の重みが重視されている。また、本校高等部においても、生徒を「青年期にさしかかった人格の形成」という視点でみると、たしかに成長の中で培った生活経験の蓄積を経て、青年期としての発達的特徴をはしばしに発見することができるようになった。それは、要約すると次のような点である。

- (1) 急激な身体的発達の伸びと第二次性徴の発現がみられる——大人の身体になる（身体的・性的成熟）
- (2) 感覚、表象、ことば、道具の操作力、記号操作力といった認知能力の萌芽が見られる。——生活経験の蓄積による自己調整力の増大、自己調整力の育ちにとともなう集中力、持続力の高まり
- (3) 自己確認・自己評価の力が育ち、いやなことを拒否したり、楽しいこと、関心のある活動に意欲的に取り組もうとする。

このような「青年期の発達的特徴」に着目し、主体的・意欲的に活動させる機会を保障することが、この時期のからだづくりの基本であると考えた。また、「主体性」の育ちは、自治能力や知的能力を育てることで期待できると考え、児童生徒会活動や教科学習を重視し、「からだづくり」のメンタルな面での育成にも努めた。

なお、「認知能力」の育ちの弱い生徒には、各実践場面でできるかぎり活動量を拡げることが「からだづくり」の基底となるとも考えてきた。

こうした3年次にわたる検討を経て、高等部のからだづくりの目標を「すすんで生き生きとからだを動かす子」とした。

【3】研究の経過（昨年度までの取り組み）

本校の研究テーマ「発達と障害に応じた教育をめざして—からだづくりを通して—」に基づき、高等部の研究主題を第1年次「すすんで運動を楽しむ子」と設定し、生徒の実態と問題点の把握、それにとともなり、指導のあり方や内容の検討を行い、運動経験の習慣化を中心とした取り組みに重点を置いてきた。

特に、自己の健康を保持、増進させることが、運動能力の向上のみならず、集中力の向上を促進し、高等部教育の目標でもある社会的自立をより確かなものにしていく基礎的な力となると考えて研究実践を重ねてきた。

第2年次になって、研究主題を単に「運動を楽しむ」だけでなく、あらゆる場面で「すすんで生き生きとからだを動かす子」と設定し、運動場面とともに生活場面での「からだづくり」を重視した。これは、保健体育、養護・訓練をベースにした取り組みを、生活一般や職業科といった領域での実践にも拡げ、運動場面で培った力が、働く意欲や態度をも育て、社会的自立をも促すものとなることを期待した取り組みでもあった。

この2年次にわたる取り組みでは、行動体力や運動能力などの面で大きな成果をあげ、特に、サッカー、バスケットボールなどの球技で培われた力が、日常生活のあらゆる場面で、意欲的、主体的に行動する力にまで発展してきている。

教育課程の中で職業科をはじめとする社会参加の課題に応えた教科、領域の比重が大きいことは言うまでもないが、この2年間の取り組みが、それらの課題をも見通したものになることが高等部教育には求められている。青年期を迎えるまでに、よきにつけ悪しきにつけ「でき上がった」からだを矯正しつつ健康を増進し、社会参加にむけてどの様に取り組むべきかが今後の大きな課題となった。

【4】本年度の取り組み

昨年までの運動場面（保健体育、養護・訓練等）に重点をおいた「からだづくり」の取り組みを通して、身体を動かすことの喜びを体得させるとともに、運動技能の向上と促進など一定の成果をあげ教育課程に定着し、3年次の今年度は授業実践の積み上げの中で生徒の変容も顕著となっている。そこで、今年度は、この取り組みを一層充実させつつ、生活場面（職業化、表現化に焦点をあてた職業科、教科的要素をもつ「知的学習」など）での実践に比重を移した取り組みとした。

それは、社会参加を前にした高等部教育の目標を一層具現化しながら、格別「青年期の発達の特徴」に着目し、その特性を生かした教育課程の創造や「授業づくり」を基底にすることの重要性を認識したことによる。

特に「からだづくり」の面では、運動場面で培ってきた力が、生活場面でどのように生かされ発展させられたか、また生活場面の実践では、態度とか技能、集団の中で生きる力といったメンタルなものに着目した取り組みとした点が大きな特徴といえる。

この点では、昨年度から試案として検討を加えて研究授業等では活用してきた「職業科における評価の基準表（試案）」（P173資料編参照）の成案を得るよう努力している。

また、今年度、全校的な取り組みとなった「授業づくり」については、昨年度の研究発表会での渡部（鳥取大学助教授）講演で提起され、実践の基底となった「授業の視点」——①発達と教育の関連（文化的な活動の中で発達の主体は育つ）②教師集団、子ども集団の意図的編成③集団指導と個別指導、④同一教材・複数課題、⑤授業の展開と評価——を全面的に受け止めて討議を加え、生徒が生き生きと活動できる授業や行事の創造に努めてきた。

なお、「授業づくり」をすすめる上で、その授業を効果的にすすめるためには、「学習集団」が個々の生徒の発達課題に対応できるものになっているかどうか重要であり、高等部では、前述したように教育課程編成上で十分な配慮を加えてきたが、授業展開の中でも、生徒の活動量を多くするためのグループ分けに創意をこらしてきた。

また、一人ひとりの発達に応じた教材提起が、青年期に焦点をあてた視点と関連させることで、実践的に主体性や意欲を喚起してきた点は重要である。